

4 寺と屋敷

※題字／森川芳聲

もくじ

- 2 巻頭言 フィリピンの英雄 …… 山口 秀範
- 4 「社中だより」 …… 住吉 優
- 5 皇居勤勞奉仕 …… (福岡中経協)
- 6 「偉人レポート」
平成に命を賭した自衛官 —
「事に臨んでは危険を顧みず」 …… 日下部晃志
- 8 グローバリズム対
ナショナリズム二〇一九 …… 木村 政信
- 9 民間人から見た教育現場⑤ …… 小田村直昌
- 10 三十八年間の
教員生活を振り返って② …… 穴井 福代
- 11 ミャンマーと日本① …… 守田 剛
- 12 私が出会いから学んできたこと、
行なってきたこと(最終回) …… 高原 朗子
- 13 立派な父と不良の息子の物語④ …… 廣木 寧
- 14 TERAKOYAふおとればーと
- 15 “あちこちde寺子屋”のご案内
- 16 歌碑のこころ(6) 編集余録 余録の余録



福岡市西区唐泊の東林寺前庭

歌碑のこころ

からとまり能許の浦波
立たぬ日はあれども家
に恋ひぬ日はなし

唐泊から間近に見える能古島の浦に波立たぬ日はあっても、我が家を恋しく思わない日はない。

※詳しい解説は16頁に掲載しています。



フィリピン人の英雄

代表世話役 山口 秀範

セブ島訪問

一月下旬の数日、寒風を逃れてフィリピンのセブ島を訪問しました。福岡中小企業経営者協会の視察ツアーに団長として参加したのです。セブ島を二十数年前に訪れた時の印象は鄙びた海辺の行楽地に過ぎませんでしたが、すっかり見違えるほど高層ホテルが建ち並び、近年のアジア諸国の発展を反映しています。

マニラで乗り換えた国内便で、セブ島に隣接するマクタン島の空港に到着します。一五二一年、この島で世界史に刻まれる事件が勃発しました。「世界一周航海中のマゼランが土人に襲われて非業の死を遂げた」と中学の教科書で習った記憶がありますが、その「土人」とは、ここマクタン島に勢力を張ったラプラブという名の部族長のことでした。

スペイン王への服従、キリスト教への改宗を強制するマゼランに対して、セブ島各地の首長たちは抵抗すら出来ませんでした。一人ラプラブのみは勇敢にも反旗を翻し、周到に準備してマゼラン軍を打ち破ったのです。

島内には立派な銅像が建ち、ヨーロッパ人のアジア侵略に立ち向かった最初の英雄として顕彰されています。近海で採れる高級魚にもラプラブの名が冠されている

おり、昨年ドウテルテ大統領は、マクタン空港を「ラプラブ空港」と改名した由、西洋の価値観至上の歴史は、ようやく各地で修正されようとしています。

ホセ・リサルとは



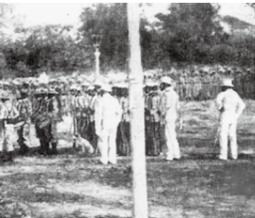
ホセ・リサル
(1861 - 1896)
[ウィキペディアより]

今回の旅では最大の都市マニラを素通りしてしまいましたが、市街の中心部に「国民的英雄」ホセ・リサルを記念する「リサル公園」があります。

ホセ・リサルは一八六一年、ルソン島の小さな村で生を享けました。中国系スペイン系の血も入ったフィリピン人です。当時はスペインの植民地支配の只中で厳しい制約下にありました。

幼少期から多彩な才能を発揮し、やがてマドリードの大学に留学して医学と哲学を修めます。更に欧州諸国で学ぶ頃には二十以上の言語に通じていたそうです。その合間に祖国を思う小説を次々と

発表しますが、それが植民地支配への批判と見做され当局から危険人物視されるようになりま



処刑場 (現 リサル公園) [ウィキペディアより]

手に渡った後で発見されました。さようなら愛する祖国、懐かしい太陽の地よ 東洋の真珠、今は無き我が楽園よ 喜んで君に捧げよう、貧しきやつれたこの命を

二度目の外遊の際に明治時代の日本も訪れ、その近代化と暖かな人情に好印象を持ったとのこと。やがて武装蜂起によつて独立を達成しようと目論むグループも現れて、フィリピン国内は次第に不穏な空気に包まれます。リサルは穏健な改革を目指していましたが、その影響力を恐れる植民地当局は遂に彼を拘束して一八九六年暮れに公開処刑しました。三十五歳の生涯でした。

ホセ・リサルの死から二年後、三百年余に亘ったスペインの統治は終わりを告げました。しかしそれは独立とは程遠く、単に支配者がアメリカへと移ったに過ぎず、真の独立までにはまだ半世紀待たねばならなかったのです。

リサルの遺書

処刑の前日リサルは「わが最後の別れ」と名付けた遺書を獄中で認めました。そしてそれは愛用の卓上アルコール灯の僅かな隙間に隠されて、遺品として妹の

支配者の言葉であるスペイン語です。リサルは固有の言語・タガログ語も操りましたが、改めて書き残すにはスペイン語の方が馴染み易かったのでしょうか。内容もリサルが自分の内面、死をどう受け止めるかに集中しつつ祖国への帰依を綴っているのに対し、吉田松陰は冒頭の歌

身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂

が象徴する通り、自らの思いを後に続く人々に遺した志の継承を願ったのです。

『留魂録』にも「春種し、夏苗し、秋刈り、冬蔵す」と、穀物に例えて「四時(季節・人生)の順環」を述べ、短くともそれなりに完結した一生もあると記した箇所があります。数え年三十歳にして生涯を閉じんとする葛藤を経て、死生を超越する工夫の末に立ち至った心境なのでしょう。

このあたりは、フィリピンの土に帰ろうとしたリサルに相通じるものを感じます。しかしここでも、「同志の士其の微衷を憐れみ継紹の人あらば」と後を託し得る人々へと松陰の心は向かっているのです。また『留魂録』には取り調べの経緯とそれに伴う自身の心跡変化が克明に綴られています。加えて松陰が獄中で知った有為の人材の紹介にも紙幅を割いています。これなども師亡き後の門人たちの活動を後押しする気持ちの表れでしょう。

こう見て来ると吉田松陰を「日本のリサル」と呼ぶことは随分的外れに感じられます。リサルが語りかける相手は祖国の大地そのものでしたが、彼の遺志を現実に引き継ぐ若者は現れませんでした。一方で『留魂録』が日本を護ろうとする人々を鼓舞せんと書かれたことは明らかでしょう。

我が国の幸運

「書きつけ終りて後」に詠まれた五首のうち二首、

討たれたる吾れをあはれと見ん人は君を崇めて夷払へよ
七たびも生きかへりつつ夷をぞ攘はん
こころ吾れ忘れぬや

にも吐露されている通り、松陰にとつて死は永遠の休息どころか、また生れ変つて来て国事に奔走するまでの一時休憩に過ぎなかつたでしょう。

この強靱な精神には感服の他ありませんが、松陰にこのような歌を詠ませた背景には、師の志を仰ぎ、継承に努める若者が存在したことを忘れてはなりません。松陰の言動があまりにも尖鋭化し、弟子たちの多くは師から遠ざかった時期もありましたが、死を賭しての実践を通じて若き志士たちを鼓舞して、遂には明治維新を成就させたのです。

欧米列強の脅威を凌ぎ一人我が国のみは植民地化を免れることが出来ました。

また江戸時代の学問興隆によつて誇るべき歴史と伝統を民族として共有出来、とりわけ国学や水戸学などが幕末の志士たちの精神を鼓舞しました。そして何よりそれらをすべて母国語である日本語で読みかつ語れたことなども、フィリピン始め他のアジア諸国の百五十年前の惨状を振り返れば、我が国の幸運と、それを呼び込んだ先人たちの労苦に感謝あるのみです。

次の御代に向けて

ホセ・リサルの祖国フィリピンは、三百五十年を超える植民地支配から独立して七十年、未だ国作りの途上であり貧困や治安悪化など難問を抱えています。しかし街には子供たちの笑顔が溢れて、将来の発展を予感させます。

一方長い歴史を誇る我が国は、敗戦による占領統治を僅か六年半受けただけで、その後遺症からまだ完全には脱却出来ていません。

真の独立国の要件は、①国土の自主防衛、②子女の国民教育、③祖国を護った英霊の顕彰、の三項目を他国の干渉をはねのけて実施することにありと心得ます。

平成を終える今、残念ながらも引け目についても確信を持って次世代へ引き渡せる状況にありません。まずは懸案の憲法改正を成し遂げて、独立の気概漲る国民を輩出する新しい御代の出発点としたいものです。

私たちの原点である草をモチーフにしたロゴです。大地から力強く生えていく草には、農業・緑化・環境づくりを通じ、人々の安心・安全を願うORECの思いが込められています。

草と共に生きる

株式会社 オーレック <http://www.orec-jp.com>
本社 〒834-0195 福岡県八女郡広川町日吉548-22 Tel:0943-32-5002(代) FAX:0943-32-6551